

RUNNING SOMEWHERE

written by HADEYA

1

その間、9秒。

健人が盗んだファイルは隣国、中国の国家機密である。健人は51秒で機密ファイルを強奪し、9秒で追跡者を撃退した。

人は彼をハンドルネームで呼ぶ。ハンドルネーム——ノーマル・ケント。

23時33分、飛んで17秒。そろそろ脅迫状に記載された犯行時刻だ。電腦警官——荒海は追跡に備えた。犯人のハンドルネームはノーマル・ケント。国家機密を盗むと言う。

ケントなるハッカーがどれだけの腕か知らないが、機密ファイルを盗む事など出来やしない。俺様の右に出るハッカーなど存在しないからだ。

荒海は当局のデータベースに侵入した経験の持ち主である。盗んだデータ量は過去最高をマーク。荒海はカリスマ・ハッカーとなり、中国秘密警察ハイテク課に属する事となった。

ディスプレイに〈回線、開戦〉とテキストが走った。侵入合図。荒海は嬉しそうにニヤリとホクソ笑んだ。

「掛かって来いよ」

ブラインドタッチでキィを乱れ打つ。タッチ速度で俺様の右に出る者などいない。一対一のサイバーバトルが展開される。ケントVS荒海。

……負けた——いとも簡単に。最初は勝ったと思っていた。事実、勝っていた。新種のウイルスを喰らって、コンピュータが物理破壊されるまでは。慌ててLANケーブルを抜き、再起動を掛けたがコンピュータは完全に破壊されており、再起動できなくなっていた。

事態を重く見た秘密警察は荒海を解雇処分した。解雇された荒海はノーマル・ケントへの復讐を誓った。

この作品はケントの孤高の闘いを描く、〈サイバーフィクション〉である。

2

誰より早くタイムカードを押した。誰より早くSVから勤務表にサインを貰い、誰より早くオフィスを後にした。

健人はロッカールームからショルダーバッグを取り、文京グリーンヒル——会社を出ると最寄りのコンビニで勤務表を派遣会社にファクスした(こうしないと給与がもらえないシステムになっているのだ)。

健人は派遣社員のテレフォン・オペレーターである。インバウンド、アウトバウンドで時給1350円。大手通信企業のプロバイダ加入促進業務、勤続三年のベテラン。

テレオペは体力的に楽な仕事で潰しが利く。だから仕事を選んだ。いざ派遣切りに合っても他のテレオペに転職できるし、そこいらの会社員みたく〈不景気〉と言う単語にビクつく心配もない。椅子に座って会話してりゃ良いだけの楽な仕事。これほど旨い仕事は早々ない。

金曜の夜だ。仕事の話は止めよう。

健人はポケットに手を入れ、白山通りを巣鴨駅の方へ向けて歩いている。七月初旬と言う事もあって周囲は茹だる暑さ。自販機で炭酸飲料を買ってジュースを飲みながら夜の千石を黙々と歩き続けた。

帰宅するとパソコンの電源を入れ、音楽プレイヤーの〈波乗り〉と言うプレイリストを再生した。美しく解放的なメロディの高速ビートが緩やかに時を刻む。缶ジュースを開け、ブラウザを起動した。リラックスしてインターネットをする。

これが健人のライフスタイル。

金曜の夜はネットサーフィン。音楽を聴きながら電腦世界を駆け巡る。そうやって三年間、生きて来た。

これからもそうやって生きるつもりだ。無味無臭の人生かも知れない。だがストレスはない。孤独かも知れない。だが金と時間はたっぷりある。最高の人生に違いない。

ポオンと言うメール着の効果音で目が覚めた。気付くと熟睡していた。健人は口元の涎を拭いて起き上がり、ディスプレイを見た。一通のメールが届いている。件名にはこう書かれていた。

〈緊急 荒海〉

メールを開けた。メールにはかつて中国当局のデータベースに侵入したハッカーの事が綴られていた。

健人を狙っていると言う。試しにネットで〈荒海〉と言う名を調べてみた。

「……大した事、ねえな」

呟き、頭の中で作戦を練り始めた。荒海は秘密警察だ。解雇されたに違いない。それで俺を逆恨みした。

辻褄は合う。目的は機密ファイルの奪還。ところが機密ファイルが見当たらないと来ている。怒り狂った荒海とやらは荒れた海の如く海岸に押し寄せていると言う訳だ。

「下らねえ」

健人はBGMのヴォリュームを上げ、キィを叩いた。案の定、荒海の目的は盗まれたファイルの奪還だった。目的が果たせない事を知った今、荒海は別の手に着手しようとしている。

荒海は健人が既にチケットを取得した夏フェスの目玉バンド〈オフ・サマー〉のライブを粉々に破壊しようと目論んでいた。

*

「今日を最後にオフ・サマーは解散する」

パンクロック・バンド〈オフ・サマー〉のリーダーである、タックル・ポートランドはサバサバした口調でメンバーに告げた。ギター担当の、CCリバイアサンが尋ねた。

「悔いはないんだな？」

「ない」

タックルの目は切実な輝きを放っている。CC はタックルの目を直視して言った。

「考え直せ」

今一度、タックルは考えた。二十年以上も続けたバンドの解散。簡単に決められる事ではない。考えた末の結論だった。

タックルは思い悩んでいた。己の無力を。無力を知ったのは先日の竜巻発生時。住む家が飛ばされ、避難を余儀なくされた市民の悲痛な表情を見た時だった。音楽で彼等を救いたい。けど音楽では救う事が出来ない。

タックルが下した決断はバンドを脱退して全米二位の人口を抱えるロサンゼルス市長選に立候補する事だった。メンバーはタックルを止めた。しかし彼の意志を崩す事は出来なかった。俺たちも脱けるよ——メンバーはタックルに足並みを揃えた。

タックルは泣いた。スタジオに籠り、号泣した。

「……考えた結果だよ」

タックルは言った。その言葉には未練が感じ取れる。CC は言った。

「続けようぜ」

「無理だ」

「お前は嘘を吐いてる。俺には分かる」

「もう決めた事だ」

嘘かも知れない。本当かも知れない。でも、これだけは確かだ。心の底から音楽が好きだ。人類が好きだし、政治が好きだ。ファッションもマイホームも朝焼けも夜の街並みも何もかも好きだ。何もかもロックンロールだ。

好きだからこそ全てを得たいと思う。好きだからこそ放棄しなければならない。

「ってな感じだ」

タックルは言った。CC は溜息を吐いた。

「……決意は固いんだな？」

「ファイナル・ライブ。派手に決めるぞ」

「だが——」

「クールに散ろうぜ」

言い残し、タックルはバックステージを後にした。ファイナル・ライブ——タックルはいつになく燃えていた。

3

フロアを歩き、ステージまで移動する。移動中、タックルは考えていた。二十年以上の音楽活動を。苦しい時もあった。楽しい時もあった。七転八倒で活動を続けた。一筋縄では行かない紆余苦節の活動。今夜、それが終わろうとしている。俺はピリオドを打とうとしている。

暗くなった夜のステージに上がると満員の観衆から「おおう！」と怒号が湧いた。タックルに続き、メンバーがステージへ上がる。

スタンドに掛けられたギターを掴むとタックルはサービスなしで不意打ちの演奏を始めた。普通なら掴みの曲を奏でるところだが、初っ端から代表曲〈キッズ・オーライ〉のイントロを奏でた。いつもと違う鬼気迫るテンションでAメロへ差し掛かる。

何もかも失われた街で。何もかも俺は得た。

水の滴る部屋で生まれ、水の音色に耳を傾けた。

政府と人類とパンクロック。

信じ、走った。さあ、行くぞ！

曲がサビに入った時、天井の照明が落ち、ステージが闇に包まれた。長年の経験からライブ中に演奏不能な状態に陥る事もシバシバだ。メンバーは高度な演奏テクで危機を回避した。この時、タックルは本能的に感じた。誰かが故意にライブを妨害している、と。それでもタックルは演奏を中断しなかった。これが最後と思い、懸命に歌い続けた。

追い風は吹いた。暗闇と化したステージに光が灯ったのだ。光源は、炎。フックの外れた照明器具が一斉にステージに落下し、その反動で爆発が起きたのだ。タックルの背後が爆風に包まれ、グレイの煙が立ち昇る。

その間、9秒。

サウンドはサビを突き抜け、Bメロへ向けて疾走中。観客は舞台演出と思い、フィーバーしている。

それから異常事態は続いた。狙われたのは主に照明器具だ。サウンドにも異変が起きた。流石にギターの音がアンプから鳴らなくなった時は演奏中断を検討したが、ギターサウンドは前触れもなく爆音となってアンプから放たれた。ディスティーションも元通りだった。

誰かが味方をしたのだ。誰かは分からないが。そうとしか説明が付かない。それから狂熱のライブは続いた。最後の曲を演奏するとタックルはマイクを手に静かに告げた———オフ・サマーは本日を持って解散する、と。

4

ノーマル・ケントが電腦世界を疾駆する。千葉幕張の闇夜を疾駆する。邪悪な存在を消す為、情報社会が産んだ三流ハッカーを仕留める為。

荒海はいた。暗く鈍い光を放つインターネットのセキュリティホールに。コソコソ隠れるようにしてニヤニヤ不気味な笑みを浮かべつつ。

キィを叩く音がする。無機質なサウンドが闇夜に不気味に響く。オタクが世界を破壊する。カタカタ、キィを叩いて破壊する。

ハッカーが団結する。ウイルスのように世界に侵食し、ウイルスのように情報を食い荒らす。事実、こいつらはウイルスを好む。ウイルスを放ち、放つ事で己の自己顕示欲を満たす。

実際にハッカーに会った事がある。連中はニヤニヤと不気味な笑みを浮かべながら懸命に挨拶を試みている。社会に溶け込もうとして爪弾きにされるのが関の山だ。連中にとってガールフレンドは右手と相場が決まっている。変態ビデオに熱狂してニヤニヤしやがる。

気味悪いったら、ありやしねえ。こんな屑どもは死んじまえば良い。今宵、俺が殺してやる。荒れた海……荒海とやらを。

懐からナイフを抜き、トラップを踏んだ。アラームが鳴り、荒海が振り向く。荒海が荒れた海のように逃げて行く。俺は静かな潮流の如く背後に回り込んだ。

言うなり俺は靴底で荒海の股間を踏み付けた。痛烈な悲鳴を上げ、荒海は前のめりに倒れた。がら空きの背中にナイフを立て、刺したまま腰まで引き裂く。荒海の刺身———パッキリ割れた背中から長い神経を一本だけ摘んでパソコンに接続してやった。

「回線、開戦」

眩き、エンターキーを押した。電腦世界をおぞましい悲鳴がつんざいた。

5

タックルはバックステージでピザを食べている。マカロニ・チーズを頬張りながらライブで起きた不可解な出来事を振り返っていた。

CC が言った。

「お前の見解は？」

タックルはピザを見つめている。

「……誰かが俺たちを救った。異論あるか？」

「一体、誰が？」

その時、宅配ピザが現れた。マカロニ・チーズの追加オーダー。

「ご苦労様。その辺に置いといて」

宅配員にそう告げた。「ありがとうございました」を告げ、宅配員は退室した。

「それにしても———」

ベーシストが言った。

「このピザ、やたら美味しいな」

「チーズの量が少ない。タックル、お前も食えよ」

タックルは無言でピザを頬張った。何気なく届いたピザに手を伸ばす。何かに手が触れ、その表情が青褪めた。

「こ、これは……」

ピザの上に書類が置かれている。〈社外秘〉と記載された書類が。タックルは手を拭い、書類を捲った。

「どうした、タックル？」

タックルの表情は陰しい。それもその筈、書類には音楽配信サイトの最大手、〈グレープフルーツ〉の巨な政治陰謀が記載されていたからだ。

「……撤回だ」

タックルが言った。CC が目を細める。

「撤回って何が？」

「解散だ」

「解散？」

タックルは顔を上げた。メンバー全員に告げた。

「深刻な事態だ……」

6

健人は宅配ピザの帽子とユニフォームを脱ぎ、フロアに放って歩き続けた。健人がタックルに届けた機密書類は業界を揺るがすメガトン級の陰謀である。音楽配信の最大手、グレイプフルーツがアーティストに無断で楽曲アレンジを行っている事を裏付ける物的証拠であった。

「き、君！ 宅配ピザを見なかったか！」

タックルが背後から健人に詰め寄った。

「見てません」

「糞！」

タックルが走った。それを見て健人は反対方向を歩いた。歩きながらタブレットの電源をオンにする。WiFi回線を利用し、インターネットにアクセスした。

7

サイバースペースを駆け巡る——ノーマル・ケントが。目当ては一つ。政府が有するエシュロンの破壊。そもそも電子メール、インターネットの閲覧記録、携帯電話の通話、全ての盗聴を一国レベルの規模で行う究極の盗聴装置、エシュロンは存在するのか。

存在するし、どこにあるかも知っている。旭川市の駐屯地にエシュロンが存在する事をケントは見抜いていた。実際にエシュロンに触れた人物からダークウェブで情報を得ていたからだ。

ダークウェブに入った。秘匿サーバーに隠されたウイルスをダウンロードするとケントは旭川市の駐屯地のサーバーに不正侵入した。トラップを回避し、ウイルスをセットする。その時、警報が鳴り響き、目の前にファイヤーウォールが出現した。

ケントは作業を急いだ。デジタル警備員——セキュリティ・プログラムが向かって来る。

「セット完了」

眩き、ケントは脱出した。間一髪だった。

翌日、日本に激震が走った。エシュロンの存在がニュースで明るみになったのだ。きっかけになったのは大規模な通信障害で民間のセキュリティ会社がエシュロンの故障が原因である事を断定した事だ。

政府が国民のプライバシーを侵害している……彼らは懸命に否定した。しかし否定できなくなった。何者かが物的証拠を大々的にネットで公開したからだ。証拠となったプログラムの一部は改ざんされ、デジタル署名が記述されていた——ノーマル・ケント、と。

健人はタイムカードを押した。仕事——ハッカーからテレフォン・オペレーターに早変わりする。隣の席の男性が健人に話し掛けて来た。

「政府、国民を監視してるよな？」

健人は答えた。

「みたいだな」

「エシュロン、誰が見付けたんだろう」

「さあな」

健人がキィを叩く。男性は仕事に戻った。健人は表情一つ変えず、黙々とキィを叩き続けていた。

8

「大変、起きて！」

理沙がパソコンの前で居眠りする健人を揺り起こした。健人が眠い目を擦った。理沙が捲し立てる。

「ビキニ・バグのチャス、暗殺されたんだって。チャスだけじゃなく、ジミヘンもジャニスもエイミー・ワインハウスも全員！環境活動家のグレイト・トーンバリーさんも逮捕！」

「……ああ」

「驚かないの？」

「もっと驚く情報を手に入れたからな」

「もっと驚く情報って？」

健人はボソリと告げた。

「井之頭貴子」

9

井之頭貴子——オレオレ詐欺の被害者。警察は主犯として山坂富男を逮捕した。ニュース・サイトはその事件を報じた。その記事が理沙のパソコンに保存されていた。

不審に思ったノーマル・ケントは山坂富男のパソコンをハッキングした。パソコンには理沙とのメールが残されていた。メールは理沙の大学の卒業名簿を高値で売る内容だった。井之頭貴子を含め、多くの被害者が出たオレオレ詐欺に理沙は一枚、噛んでいた事になる。

健人の最愛の女性は犯罪者だったのだ。

10

「……どこで、その情報を？」

理沙の口調は動揺している。健人は淡々と続けた。

「探偵の知り合いがいるんだ。確実な情報だ」

「私を調査した訳？」

「ああ」

「ちょ、ちょっと名簿を売っただけじゃん？まさか警察には言わないよね？」

健人は頷き、なお淡々と告げた。

「別れよう」

「本気？」

健人は頷いた。そして告げた。

「出て行ってくれ。もう会う事もないだろう。連絡もしないでくれ」

理沙は無言でバッグを持ち、健人の住居を後にした。ドアが閉まる。健人は立ち上がり、内側から鍵を掛けた。思わず、溜息が零れた。

11

WINDOWS を起動する。起動までの間に食パンを食べた。

ディスプレイが起動した。デスクトップの壁紙には理沙の美しい写真が映し出されている。健人は……断腸の想いで壁紙を消した。

「さて……今日は何のデータを漁るかな」

少し考え、健人はキィを叩いた。流れるようなブラインドタッチでキィを叩き続けた。週末の昼下がり。健人はノーマル・ケントに変身し、巨悪との闘いに身を投じた。

12

現在——2025年の社会は平穏だ。そこではクローンを用いた危険な遺伝子実験も凶悪犯罪もなく、AIも社会的地位を獲得している。

悪は繁栄しない。俺が打倒するからだ。

*

朝日が昇る。燦燦と輝く陽光の下、健人が出社する。

健人はインカムを装着し、テレオペの仕事に熟している。カタカタとキィを叩きながら。

「世の中、平和だな？」

隣の社員がキィ入力をしながら告げた。俺もキィ入力をしながら答えた。

「暗黒世界よりマシだろう。ところで、ノーマル・ケントが引退したらしいぜ」

「マジで?!」

「ああ、伝説のハッカー。掲示板で話題になってる……トイレ、行って来るわ」

言いながら健人は立ち上がった。オフィスを出て、フロアを歩く。

……ところと言わなきゃならない事がある。世界が平和になり、俺は引退したんだ。

健人がエレベーターに乗る。ドアの開閉ボタンを押す。

厳密には引退したんじゃない。ハンドルネームを変えたのだ。

エレベーターの中の健人が消える。忽然、と。エレベーターのドアが閉まる。

新しいハンドルネームは——バトルTOKYO。

*

エレベーターのドアが開く。そこはダークウェブ。ウェブアーマーで完全武装した健人……伝説のハッカーがいる——バトル・トーキョーが。

凶悪犯罪が待ち伏せる、極悪世界をどう生きるのか。答えは一つ——

もう俺を見る事もないだろう。これが俺からの最後のメッセージだ——

「侵入者だな？」

敵が尋ねた。健人は答えた。

「そうだ。ハンドルネーム、バトル・トーキョー。これより闘いに没入する」

ハンド・キャノンが火を噴いた。先制攻撃——それが合図となって、右に左にマズルフラッシュの嵐が光る。

血が騒ぐ。血液が沸騰する。バトル・トーキョーが闘う。今日と言う日を、明日へ向かって。さあ——

——ブツ放すぜ。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872